

都会の暑さに揉まれた二日間僕は今までにない貴重な体験をした。共に日本トップクラスの企業、大学を肌で体感したことは刺激になった。

新日鉄住金でのディレクトフォースでは、意識の高い多くの社員やOBの方々の意見をきくことができた。自分の体験を話してくださったOBの方の中には、その中でも藤村さんという方がしきりに強調した「トップに立つと見える世界が違う」という言葉が印象に残った。藤村さんは新日鉄住金のOBではなくブリヂストンの元社員だ。

仙台のスパイクタイヤの公害問題の解決やスタッドレスタイヤの開発に尽力された方だ。この言葉は、ヨーロッパの支部長をしていたときに感じたものだ、とおっしゃっていた。トップに立つと自分のやりたいことがやれ、自分の世界が格段に広がるそう。第一線で働いてきた方の言葉だけに重みを感じられた。どんな世界でも向上心を持って努力してきた姿には憧れた。僕も常に向上心を持ち続けたいと思った。その他にもやはり様々な分野で活躍されている先輩方のエピソードを聞きたかったのだが、この後の筑波大学での活動の時間との関係でディレクトフォースを半分ほどで切り上げたことは残念だった。

筑波大学での活動は主に計算科学研究所の設備見学、森正夫教授の講演及び質問であった。東京駅から、バスに揺られて約2時間かかり又、帰りもつくばエクスプレス(快速)と京浜東北線を利用したとはいえ、往復の移動だけで3時間以上かかるため筑波大学での活動時間は1時間ほどしかなかった。それでも活動は有意義であった。筑波大学は日本最大級の研究施設であり当然レベルも高い。その一部を直に見ることができるのは幸運であろう。僕のグループは、スーパーコンピューター"HA-PACS"を見学した。事前に職員の方から、"スーパーコンピューターとは、その時代の通常のコンピューターの1000倍以上の性能を持つコンピューターである"と教えていただいたが、実物を目にすると確かに頷ける。多くのコンピューターが縦横に連なっているのだ。その迫力には圧倒された。このスパコンは、自然科学分野のシミュレーション実験で主に使用されているそう。今まで、写真などでしか見たことがなかったスパコンを間近で見られたのは、嬉しい。このような機会は滅多にないだろう。その後、森教授による講演である。教授は、第一線で活躍されている天文学者である。

彼の研究の一部は「ニュートン」9月号に掲載されている。教授は、「ニュートン」に掲載された自身の研究を、分かりやすく説明してくださった。宇宙での現象を計算で解明しようとするのには科学の不思議を感じた。その後の質問タイムでは、班員がそれぞれ質問をした。例えば、

「研究者として大切なこととは?」や「研究者に向いている性格とは?」といった質問に対しては、「偏見なくデータを見る(客観的にみる)、しかしときには直感も大切」、「自分の好きなことにとことん"はまれる"人が研究者に向いている」が帰ってきた。また「研究テーマの決め方」や「外国人と日本人の違いについて」といった質問には、「別の大学の人と話していたら閃いた」といった意外な答えや「外国人は、ストレートではっきりしているため研究をやる上では日本人よりやり易い」といった生の声もかえってきた。しかし様々な意見のやり取りが行われたが「モチベーションをどうやって保つのですか?」という質問に対する「やる気が減ることはない」という答えが最も印象に残った。自分のやっていることに誇りを持っている証であろう。

OB-OGとの懇談会で感じたのは、月並みな表現になるが"時間の使い方が上手である"ということだった。1日24時間を自分のために有効に使えていたのだ。又皆、勉強だけでなく部活動や自分のやりたいことを、二高生時代にやっていた。これも自己管理と自己分析がしっかりできていたからなのだろう。無為に時間を過ごしてし

まうことが多い自分とは大違いである。彼らの話を聞いてこのままではいけないと気づかされた。その他にもそれぞれ自分の体験段をもっており例えば、入学直後の進路希望調査でなんとなく東大と書いた人や、放課後に友達と遊ぶために、朝早く学校に来ていた先輩のエピソードは、面白かった。東大には、変人がたくさんいると多くの先輩が、語っていたが、二高にもやはり多くいると思う。僕の周りには、良い意味での"変人"が多くいると思う。そんな彼らから、多くを学びたいと思う。

東京大学のオープンキャンパスは多くの人が訪れていた。僕は理学部を見学した。多くの研究室を見て回ったがどの研究室も、日本トップに恥じない雰囲気と設備を備えていたように思う。又、理学部に限ったことではないだろうが、外国人の学生(留学生)が多かったように思う。どの研究室にも二人ほどはいたと思う。特にアジア系の方が多いように感じられた。昨今日本の"内なるグローバル化"が盛んに至るところで言われているが、この東大でも感じる事ができた。日本から海外へ出ていく留学生は減少していると言われている。日本のトップの大学にも多くの留学生が学びにきている。もっと日本人(自分も含め)も海外へ目を向けるべきだと思う。話は元に戻る。研究室では学生が、丁寧に説明をしてくださった。やはりここでも、留学生の方が説明をしてくださったケースがあった。彼らは日本がとても上手とまではいかなくとも日本語で一般の見学者に説明をしていた。東大の研究室で外国人に日本語で説明を受けるとは思っていなかったのが少々驚いた。見学を通して、以前持っていた東大に対して持っていたイメージが変わった。以前は硬派でピリピリした雰囲気をもっていてなんとなくよそ者を受け付けられない感じがしていたが、実際に自分で見てみると、学生は人柄の柔らかい人が多く、解放的な雰囲気があった。さらに、ここで印象に残ったのは、小中学生又は高校一年生と思わしき人が多かったことだ。また、ただ見たり聞いたりしているだけでなく、積極的に質問をしたり学生と会話をする姿が見受けられた。やはり全国のトップレベルの人たちは、明確に自分の将来のことを考えているのだろう。彼らの姿を見て僕も、自分の将来の形をもっと具体的に考えたい。

事前学習で、訪問先を自分たちで選び、また生徒自身でアポイントメントを取るなど、自主的に行動することが多かった。早い時期に参加者を募って、早い段階で、計画をたてたりしたからこそ、積極的に活動ができたと思う。初めは、少し参加に躊躇していたが、様々な体験をすることが、できた今回の東大見学会は、単なる大学見学だけではなく多くの人の意見、教えをきくことができ自らの成長につながったと思う。それでも事前の企業へ送る質問の内容を書いたメールを締め切りギリギリに提出したりと他人に迷惑をかける行動をしていた場面が、少なからずあったと思う。まだまだ内面の成長はできると思う。

今回の東大見学会全国で感じたことは自分自身の甘さだ。トップレベルの人たちは、自分の考え、ビジョンをはっきりと持っている。自分は、気分流されたり恣意的に行動してしまうことが多い。又、周りのことを気にかけず迷惑をかけてしまっていることもある。これからは、その時なにをすればよいのか、また常に視野を広く保てる、自分で考え実行できる人間へと成長したい。